
ファイズ&デルタ

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファイズ&デルタ

【Nコード】

N3787C

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

とある広場でオルフェノクに襲われた少女は、巧によって介抱され……。

Episode 1 (前書き)

2003年、オルフェノクと言う人類の進化系が、世界を支配しようとした。

これは、その世界とは違う物語、別の世界パラレルワールドの物語である。

Episode 1

とある広場に、一人の少女。そしてその少女を囲む数人の男達。

「お前達、何の用だ？」

少女がそう訊ねると、男達は全員、オルフェノクと言う怪物に変身した。

「何だよ？お前ら・・・」

少女は怯え、腰を抜かして地べたに座り込んだ。

その瞬間、オルフェノク達は少女に攻撃をした。

「キャ!？」

刹那、少女は何が起こったのか解らない様子で宙を舞い、地面に叩き付けられた。

「痛!」

少女は徐に立ち上がり、その場から逃げ出すが、オルフェノクはそれを見過ぐす筈が無く、追い掛ける。

「囲め!」

一体のオルフェノクが言うのと、他のオルフェノク達が少女の前、横、斜めと行く手を阻んだ。

少女は慌てて立ち止まり、後退するが、途中で背中が支えた。

少女は恐る恐る後ろ向いた。

「はっ!」

目の前のオルフェノクは、手先に生えた尖った爪たなざきを少女の胸にグサツと刺した。

「うっ!」

少女は呻き声をあげ、気を失った。

少女が目を覚ますと、ベッドの上にいた。

「夢・・・?」

少女は第一声を放った後、ハッと気が付いた様に胸に手を当てた。包帯が巻かれている。

「目が覚めたか」

その声と共に、一人の男が少女の視界に現れた。

「此処は・・・？」

「俺の家だ。」

お前、広場で倒れてたんだぞ。凄い出血だったからな。家に連れ帰って手当させて貰った」

それを聞いた少女は、顔をカーツと赤くした。

「見たわね！？私の裸！」

「見て無えよ。て言うか黙って寝てろ。傷が開くぞ」

男はそう言っ、て、少女の視界から消えた。

「ねえ」

「ああ？」

「あんたの名前、教えてくれないか？」

「・・・乾いぬ 巧たかしだ」

「犬みたいな名前だな。私は長谷川はせがわ 美幸、宜しくな」

巧はそれを聞くと、去って行ってしまった。

その後直ぐ、美幸は起き上がり、包帯を外した。

（こんな物、私には・・・）

美幸は胸の傷に手を翳して目を瞑った。

すると、一瞬にして傷が消えた。

トンネルの中を走る一台のバイク。乗っているのは、巧である。

巧は路上に女を見付けると、その女の前でバイクを止めた。

「ベルトをこちらに渡して貰おうか」

女はそう言っ、て、オルフェノクに変身した。

「悪いな、こいつは渡せねえんだ」

巧はバイクから降りると、積んでいたケースを開け、ベルトを装

着してファイズフォンを取り出し、変身コードを入力する。

555、Enter

『Standby』

と、ファイズフォンから音声が響く。

「変身！」

巧はファイズフォンをベルトに装填。

『Complete!』

その音声の後、体に赤いラインが走り、巧は光りを放ってファイズに変身した。

「はぁ！」

ファイズはオルフェノクに駆け寄り、拳を繰り出した。

「ふっ！」

オルフェノクはファイズの攻撃を受け止め、蹴り飛ばした。

ファイズは宙を舞い、ベルトが外れた。

刹那、ファイズは変身が解けてしまった。

オルフェノクは人間体に戻り、ベルトを拾って装着した。

「ベルトを返せ！」

巧は叫ぶが、女はシカトして変身コードを入力。

「変身！」

女はベルトにファイズフォンを装填した。

『Complete!』

その瞬間、女はファイズに変身。

「フッフ、今樂にしてあげるわ」

ファイズはそう言って、ゆっくりと巧に歩み寄る。

すると、何処からか猛スピードで虎をモチーフにしたタイガーオルフェノクが現れ、ファイズに襲い掛かった。

「なっ、何だ貴様は!？」

ファイズは訊ねるが、タイガーオルフェノクは唸るだけだ。

「何だか知らないが、殺されたい様だな」

ファイズがそう言った瞬間、タイガーオルフェノクの姿が消え、

背後に現れた。

「グワオッ！」

タイガーオルフェノクはファイズを殴り、吹っ飛ばした。
宙を舞ったファイズはベルトが外れ、変身が解けてしまった。

女は地面に落ちるとオルフェノクに変身。タイガーオルフェノクに襲い掛かった。が、タイガーオルフェノクはスツとかわし、^{ガトリン}連続^{ダガン}拳を放った。

そして相手が怯んだ所で、鋭利な鉤爪で引っ掻いた。

「アッ！」

オルフェノクは悲鳴を上げ、後退った。

「くっ、今日の所は・・・見逃してやる・・・」

オルフェノクは女の姿に戻り、びっこを引いて去って行く。

「逃がさない」

タイガーオルフェノクはそう言って、女に飛び掛かった。

タイガーオルフェノクの鉤爪が女の背中を切り裂く。

女は悲鳴を上げ、炎に包まれ、灰になって跡形も無く消え去った。

巧は呆氣に取られていた。

「お前・・・？」

タイガーオルフェノクは巧の方を向くと、ベルトを拾って彼に差し出した。

「お前のだろ？ 取り返してやったぞ」

巧はベルトを受け取った。

「貸しだ。返してくれよ？」

タイガーオルフェノクはそう言うと、走り去って行った。

美幸は、台所で作業をしていた。どうやら、料理を作っている様だ。

「あ、お帰り」

巧に気付いた美幸は、笑顔でそう言った。

「今ね、とびつきり美味しい御飯作ってるから待ってて」
そう言って、ガスを調節し、調味料等を加える美幸。

「お待たせ」

美幸は出来上がったばかりの料理を食卓に並べた。

巧はフーフーして食べ始めた。

「猫舌なんだ？」

巧は顔を上げて

「悪いか？」

と言った。

「否、全然！て言うか私も猫舌だし！」

「ごっそさん」

食べ終わると巧はそう言った。

「ねえ、どうだった？」

「何が？」

「料理の味」

「ああ、美味かったぞ。真理まりが作る料理よりな」

「真理、って？」

巧は席を立つと、棚の上にある写真立てを取った。それには、とても可愛い少女が写っている写真が挟まっていた。

「俺の恋人だった」

そう言って巧は写真立てを美幸に渡した。

途端、美幸は写真を落とし、しゃがんで頭を抱えた。

「嫌、嫌！」

巧は驚いた顔で美幸を見つめる。

深夜——路上にオルフェノクと、腰にデルタのベルトを巻いた少女が、向かい合う様に立っていた。

少女はニヤリと笑うと、徐にデルタフォンをズボンのポケットから取り出した。

「変身」

少女はマイクロフォンに向かってそう言った。

『Standby』

と、デルタフォンから音声が発せられ、少女はそれをベルトに付けられたデルタムーバーに装填した。

『Complete!』

その瞬間、少女の体にラインが走り、光りを放ってデルタに変身した。

「フッ」

仮面の下で少女、デルタは再び笑い、足を一歩前に出した。構えるオルフェノク。

デルタは、ベルトのミッションメモリーを外し、デルタムーバーに差し込む。

『Ready』

の音声の後、デルタはデルタムーバーをポインターモードにし、「Check!」

と、マイクロフォンに向かって呟く。

『Exceed charge』

と、エネルギーがチャージされ、デルタは必殺技のルシファーズハンマーを放った。

オルフェノクは炎に包まれ、灰と化して消滅した。

Episode 2

朝、美幸はベッドの中で目が覚めた。勿論、自宅である。

美幸はベッドから出ると、着替を済ませ、廊下に出て直ぐ階段を降りてトイレに向かい、尿を足して洗面所に行き顔を洗った。そしてリビングで食事を済ませ、家を出て行った。

ベルトを巻いた少女は、表札に長谷川と書かれた家の前に立っていた。

ガチャ——扉が開き、中から美幸が出て来た。

「・・・見付けた」

少女は美幸を見るとそう言った。

「あ、あんたは！」

気が付いた美幸はそう発した。

少女はニヤリと笑い、徐にデルタフォンを取り出した。

「変身」

『Standby』

少女はデルタフォンをデルタムーバーにセットする。

『Complete』

直後、少女に体にラインが走り、デルタへと変身する。

美幸は焦り、後退りをする。が、扉によってそれは遮られた。

デルタはゆっくり、美幸に歩み寄る。

「待て！」

と、後ろから声がし、デルタは振り向いた。その先には、ファイズベルトを装着した巧が立っていた。

「変身！」

巧はファイズフォンをベルトにセットすると、

『Complete』

ラインが走り、巧はファイズに変身した。

「巧、私の邪魔しないで」

デルタはそう言うと、ファイズに襲い掛かった。

ファイズは襲い来るデルタを避け、

『Ready』

と、ファイズポインターにミッションメモリーをセットし、右足に装着する。

「目を覚ませ真理！」

ファイズはフォンを開いてEnterキーを押した。

『Exceed charge』

ファイズは飛び上がり、クリムゾンスマッシュを放った。

デルタは慌てて腕を交差して攻撃をガードするが、堪えきれずに喰らい、吹っ飛んでベルトが外れてしまった。

デルタは地面に叩き付けられ、変身解除。気を失った。

「真理！」

ファイズは駆け寄り、揺すった。

「・・・巧？」

真理は目を開けると、そう放った。

「私、どうしてたの？」

「デルタに取り憑かれてたんだ。けど、もう大丈夫だ」

「そう・・・。ありがとね」

そう言うと、真理は再び気を失った。

するとそこへ、

「デルタのベルトは頂きましたよ」

と言う声が聞こえて来た。

「何!？」

ファイズは振り向いた。その先には、ラッキー・クローバーの琢磨^{たくま} 逸郎がデルタのベルトを持って立っていた。

「ベルトを返せ！」

「嫌ですよ、折角手に入れた物を手放すなんて」

琢磨はそう言うのと、ベルトを装着し、デルタフォンに向かって、
「変身」

『Standby』

と、その時、一瞬にしてベルトとデルタフォンが消えた。

「消えた？」

「こっちよ」

琢磨とファイズは声のする方を向いた。その方向は、長谷川家の前。美幸が立っている場所だ。

「おい、何をするつもりだ!？」

ファイズは訊ねたが、美幸は何も答えず、ベルトを装着した。

「変身」

と、デルタフォンをデルタムーバーに装填する。

『Complete』

その瞬間、美幸の体にラインが走り、光りを放ってデルタに変身した。

「力が、力が漲^{みなぎ}って来る!」

デルタは自分の体を確認すると、そう言って琢磨に駆け寄った。

「くっ、来るな!」

琢磨は焦りの表情を見せ、その場から逃げ出した。

デルタは立ち止まり、デルタムーバーからデルタフォンを外し、
変身を解除した。

「おい、大丈夫なのか？」

ファイズは美幸に訊ねた。

「何が？」

と、振り向き様に答える美幸。

「いや、その、変身しても自分を保っていられるのか、って。て言うか、お前何も聞かないんだな。ベルトの事とか」

「聞かなきゃ駄目なの？」

「別にそう言う訳じゃねえけど。ただ、あまり驚いて無いみたいだ

からな」

「そりゃまあ、人が化け物に変身する所とか何度も見てるから、驚きやしないよ」

ファイズは頭に疑問符を浮かべた。

「所で、何時までその格好でいるつもり？」

美幸がそう訊ねると、ファイズは思い出したかの様にファイズフォンの電源ボタンを押し、変身を解除した。

「じゃ、私はこれで」

美幸は軽く頭を下げ、去って行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3787c/>

ファイル&デルタ

2011年1月15日15時08分発行